

主日礼拝説教

2017.3.12

『十字架に向かって』

受難節（レント）第2回

マタイの福音書 20章17~28節

和泉聖書教会

牧師 五十嵐 賢志

新約聖書 マタイの福音書 20章17~28節

さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。

「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるために、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。イエスが彼女に、

「どんな願いですか」

と言われると、彼女は言った。

「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりあなたの右に、ひとは左にすわれるようにおことばを下さい。」

けれども、イエスは答えて言われた。

「あなたがたは自分が何を求めいるのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」

彼らは「できます」と言った。イエスは言われた。

「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」

このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。

「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力を振るいます。あなたがたの間

では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

梗 概

序

- I. 純粹な思い
- II. 先取りのことば
- III. 愛する方の手から受けよう

結

序

人は、みな、純粋な動機とやましい思いとが混在しているものです。善いことの目的でやり始めたけれども、それによって人から評価されたいという野心を持っています。ここにいる男たちがそうで、そのうち二人は兄弟で、彼らの母親にその思いを代弁させようとしてしました。それが「ゼベダイの子たち」、ここでは名が伏されていますが、ヤコブとヨハネです。同じエピソードがマルコの福音書にもありますが、ここでは母親は登場せず「ゼベダイの子、ヤコブとヨハネが…」とあります。ですから、母親が息子たちのために余計なことをしたというのではないようです。彼らの思惑であったのでしょう。

純粋な動機と不純な思い、それは彼らに限ったことではありません。好きな女の子に惹かれて教会に来るようになったという人もあるでしょう。不純な動機がおおかたで、純粋な思いがほとんどなかったという人もあるいはいるでしょう。けれども、いつまでもそのままではありません。人は変わります。

私たちの主イエスは、人が変わっていくために、その人たちにことばをかけておられます。そのことばに耳を傾けてみたいのです。

1. 純粋な思い

「ゼベダイの子たち」そしてその母親が出てくることの^{いきさつ}経緯はこうです。主イエスは、ご自分が十字架にかかれることをたびたび予告してこられました。それが、これで三度目です。弟子たちは、それを聞き流すことなどできませんから、何か大変なことが起こるので

はと、何かしらのものを感じていたに違いありません。一度目に死と復活を主が告げられたとき、ペテロは「そんなことあろうはずがない」と言ってイエスをいさめ、手厳しい叱責を受けました。彼らには、イエスのことばを受けとめ理解する力がまだなかったのです。それでこのことについて尋ねるのをみな恐れてしていました。しかし、三度目にこの予告がなされたとき、「ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがあります」と言ったのです。

ここに疑問が生じます。どうして母親がここに出てくるのか、ということですが。

子どものことで親が出てくるのは、たいてい子どもでは処理できないことに遭遇した場面です。学校でいじめがあって親が出て行くとか、何か悪いことをして謝りに行くとかそういうことです。けれども、「ゼベダイの子たち」はもういい大人です。先ほども少し触れましたが、マルコの福音書によると、彼らは自らの意志でイエスにお願いしています。彼らがずるくて、母の言うことなら聞いてくれるかも、と親を出しに使ったのでしょうか。

しかし、そうとも言い難いのです。「母が…ひれ伏して、お願いがある」と言ったのです。利用されて渋々出てきたとは思えない、むしろ積極的な行為でさえあります。

彼らの母の心にはどんな思いがあったのでしょうか。息子を「ひとり右に、ひとりは左に…」と願ったのは、「あなたさまのお役に立てていただけますように」という思いだったのではないのでしょうか。あのサムエルを授かり、その幼子の一生を神に差し出したハンナの心と通じるものがあると思います。御国の座において「右と左」という言い方は、一位と二位を独占すると取れるので誤解を招きます

が、純粹な思いとしては、そういうことであつたと思うのです。理解しがたいイエスの死の予告をたびたび聞いて、

「ただならぬことが起きるに違いない、ならば命に代えて、この息子たちをあなたのお側で働かせてください」

という願つたのでしょう。イエスはこれに答えられました。「あなたがたは自分が何を求めているか、わかっていない」と。これから何が起こるのか正確にわかっておらず、それに伴って誰がどうなるのか予測がつかない、だから何を求めているのかわからなくて当然です。しかし、この方のことばは、わかっていないがゆえに退けたものではありません。どこまでも主イエスにお仕えしたい、という思いだけはくみ取っておられます。

ここに無理解であるがゆえの不器用な献身が表されています。そして、御国において右と左に、という人を出し抜こうとしている不純な動機も見えています。しかし、それらをイエスが大きく受けとめておられるということを見ることができるのです。

II. 先取りのことば

母の願いを受けとめ、イエスは「ゼベダイの子たち」に問います。

「わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか」

「杯を飲む」とは、どういう意味でしょう。「盃事」ということばがありますが、「盃をとりかわしそれによって約束をかためること」を言います。同じような感覚が、このユダヤ社会にもあつたのでしょう。主イエスは、十字架前夜、ゲッセマネという園で祈られたときに、こう言われました。

「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」(マタイ 26:39)

もう一度、「どうしても飲まずに済まされぬさかずきでしたら、どうぞみこころのとおりになさってください」(同 42) と祈りました。このゲッセマネの祈りには、「ペテロとゼベダイの子ふたり」を伴ってであると記されていますから、ヤコブとヨハネとに語った「杯」はこの祈りの中にあるそれと同じです。そして、その杯は、再三語ってきた「人の子は…引き渡され…死刑に定め」られ、十字架につけられて死ぬということです。託された使命に同意し、それを果たすと誓うこと、それが「杯を飲む」ということです。

彼らは、イエスからそれを飲むことができるか、と問われて「できます」と答えました。ヤコブとヨハネの二人だけの思いというより、ほかの十人も含め弟子たちみなのも思いでもあったでしょう。彼らは、イエスの十字架の予告を聞いていたにもかかわらず、誰ひとりそれを受けとめることもその意味を理解することもできないでおりました。その意味することを知らないままで、それができると言ったのです。

よくもそんなことが言えたものだ、と思わないでしょうか。逆にわかっていたら怖くて言えなかったかもしれません。

しかし、それに対するイエスのことばは意外です。

「あなたがたはわたしの杯を飲みはします」

微妙な言い回しです。「飲みはします」の「は」とはどういう意味でしょう。この部分は直訳すると

「あなたがたは確かにわたしの杯を飲むであろう」

となります。未来形の表現です。「いつかは飲むことになるが、今ではない」という意味合いです。これは、おそらく、ヤコブが剣

で殺され、十二人の中で最初の殉教者となったことを指しているでしょう。ヨハネも迫害を受けて島流しにされました。使徒たちのほとんどは、多くの迫害、苦しみを受け、処刑されました。ひとり一人に、主から差し出された杯があったのです。

キリストを信じてどんな人生を送り、どんな最期を迎えるか、知りもしないことです。しかし、彼らは「キリストの杯を飲みます」と断言し、その通りに生き抜いていったのです。これらは、特別な信仰者の意志の強さによるものなのでしょうか。そうではありません。それはちょうど私たちの信仰告白と同じです。私たちは「信じます」と告白し、聖く生きると誓いました。けれども、その決断はときより揺らぎます。誓ったことが守れないことも出てきます。そもそも、私たちがことばにしたようには生きられないのです。しかし、キリストの弟子たちは、結果的に彼らのことばに生き、そしてそれに殉じていきました。

信仰の告白は、できそうに思えるようになったからするのではなく、先取りです。言ったとおりにさせていただけると、これが私たちの信仰です。

Ⅲ. 愛する方の手から受けよう

それにしても、ヤコブとヨハネ、そして彼らの母の行為は、純粹な動機が含むとはいえ、不純なものが混じっています。そして、それが他の十人にも飛び火して、たちまち順番争いになってしまいました。どれだけ主イエスを愛しているか、誰が真っ先にこの方のために死ぬるか、比較して、ランク付けをするようになるのです。

お互いがお互いを格付けし、一般の人へのアンケートをもとに、それが合っているかどうか、だれがワースト一位になるかで一喜一憂することを面白がる番組があります。どうして世の中はこうも比較してランク付けしたがるのでしょうか。そして、より順位の高いものが利益を独占するそういう形になっています。

主イエスは言われました。

「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力を振るいます。あなたがたの間では、そうではありません」

「異邦人の支配者」というのは、ユダヤ人にとっての異邦人、ギリシヤ人やローマ人のことではありません。神の御国から見た異邦人という意味です。世の中は支配し権威を振るう社会であるということ、それは誰もが知ってのとおりだ、と主は言いわれます。しかし、御国の民はそうではない考え方に生きています。

キリスト教会も、どこかよその宗教団体のように、政治家を出し、閣僚を輩出し、世の中に発言力を持つ存在になるべきなのでしょう。いいえ。支配に対抗するためにそれ以上の力を持つようとするならば、それは御国のものの考え方ではありません。そして、その御国の考え方は、世の中のそれと正反対のことであるとイエスは言われます。

しかし、「偉くなりたいと思う者は…仕える者に…先に立ちたいと思う者は…しもべに…」というこの方のことばは私たちに困惑させます。具体的に何をすることがこの生き方をすることになるのか、なかなかつかめていないというのが実情でしょう。ただ、モデルはあります。私たちの主イエスがどのように人に仕え、そのしもべになったのかということです。この方は、病んでいるの人と共におり、貧しい人

々と共に過ごされました。弱っている人たちを力づけ、悲しんでいる人と共に涙を流し、小さな子どもたちを主イエスは愛されました。

キリスト者の生き方には「型」があるのです。この世のあり方の逆を行くということです。世の中が目指す方向の逆を行くことがキリスト者の道であると言っても言い過ぎではないでしょう。そのような物の見方で、想像力を働かせながらこの道を進んでいきたいと願います。

そして、その行き着く先にあるのが十字架であると言えます。この教えのしめくくりで主はこう言われました。

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです」

この最後の部分「いのちを与えるためであるのと同じ」ということばが響きます。キリスト者の生きる道は、キリストと「同じ」であるということ、十字架であるということです。

だからといってすべての人が殉教することを意味してはいません。しかし、ある意味それが求められたときに、差し出す決意が求められていると言えます。

ボンヘッファーの歌「善き力に」の中にこうありました。私たちはそれを声高らかに歌いました。

たとい 主から差し出される杯が苦くとも
恐れず 感謝を込めて 愛する手から受けよう

誰もが杯を差し出されるわけではありません。けれども、時に、思いもよらぬ人に、杯が差し出されるでしょう。もし、私にそれが求

められたなら、その杯を飲む者でありたいと心から願います。「飲むことができるか」と問われて「できます」とこたえられるかはわかりません。むしろ、先取りして「できます」と言ってしまうほうが良いのかもしれませんが。いずれにしても、差し出されたときに、それがどれだけ苦き杯であったとしても、恐れることをせず、感謝を込めて愛するお方の手から受けたいと願います。

結

十字架に向かって主イエスは進んで行かれました。このお方だけが十字架に向かって行ったのではありません。キリストを信じる者たちが、みな十字架に向かって進んでいくのです。私たちひとり一人に、どのような負うべき十字架があるのかはわかりません。私たちの心の思いは、つねに純粹ではありません。しかし、十字架に向かって行くときに、よこしまな思いがそぎ落とされて、私たちが信じ願うことを行わせていただけるのだと思います。